

相談支援事業所 相談に関する報告 支援に課題を感じた事例や傾向 (令和2年6月～令和2年7月)

春日苑	補装具・日常生活用具購入時に、店舗職員やサービス事業所等から市の助成制度の説明及び推奨があったが、手続きの煩雑さ理解の難しさから利用に至っていなかったケースが複数あった。必要な制度・タイミングで利用に繋げる為に、支援センターが早期に介入できるサポート体制の必要性を感じている。
かすがい	福祉サービスの利用実績がない40代と50代の知的障がいがある相談者。かすがいに繋がったときには、それぞれ早急に成年後見制度や福祉サービスの介入が必要になっていたケース。両者とも唯一医療には繋がっていたことから、相談支援の実践の中で地域医療との繋がりを持ち、世帯を把握できる仕組みづくりが必要と感じている。
JHNまある	さまざまな家庭・環境の方がおり、同居でも単身でも障がい児・者への関わりだけでなく、その家族や関係者も含めての問題が多種多様に表出されることがある。何かの制度や福祉サービス・地域生活支援事業に繋がれば解決というケースはむしろ少なく、地域や関係機関との継続的なネットワークの構築が必要と思われる。
あっとわん	障がいのある両親と障がいのある子を含む複数の子がいる家庭のケース。障がいのある子が犯罪に巻き込まれたことをきっかけに福祉サービスの利用も検討されたが、家庭内での子どもへの対応方法、虐待通告を伴う近隣住人との関係性、その他のきょうだいへの対応、転居に伴う経済面・環境整備等の問題がある。他機関との調整を重ね対応している。
しゃきょう	高齢の親と精神障がいをもつ子の生活保護世帯のケース。互いに暴力をふるい、家族関係、経済面、医療などの複雑な問題を抱えている。医療機関、地域包括支援センター、市生活支援課、市障がい福祉課、ケアマネージャー、社協福祉サービス課などが連携し、支援が途切れないよう包括的な支援の必要性を感じている。



課題に感じていること	相談対応していて見えてきたこと
地域や関係機関との継続的なネットワークの構築	<ul style="list-style-type: none"> ・支援センターが関わる事ができているのは、ほんの一部のケースであり、障がい児・者やその家族に地域の中で依然として情報が届かず、介入した時に「もっと早く支援が届いていれば…」と思うことが多い。 ・医療や福祉サービスには繋がっていても、関係機関がもう少し生活場面を想像して、丁寧な情報提供や繋がりがあれば未然に防げたケースも少なくない。 ・8050問題は長期化したひきこもり世帯だけでなく多くの障がい・高齢世帯に通じるもので、多問題になっており、一支援機関だけで対応するのは難しい。 ・制度や支援センターの周知はもちろん、支援者同士が知り合い、お互いにそれぞれの役割やできること・できないことを把握・共有しながら連携することの大切さを日々感じている。



【多問題のケースを関係者が共有・理解する場が必要】

障がい福祉分野の関わりだけでなく、子育て・教育・医療・保健・介護・司法・経済など多種多様な問題が絡み合い、制度や福祉サービス利用で解決するような家族関係や環境ではないケースも多くある。関係者・支援者がそれぞれのケースを多方面から理解すること、またお互いの立場や役割を理解しあい、困っているケースの早期発見・介入の機会に繋げることや、包括的かつ横断的な支援になるような繋がりを持つ場を作りたい。

※令和元年度第3回自立支援協議会に提出した課題に対する提案の取り組みを開始できていない。